

ノルウェーに保存されていた20世紀初頭の朝鮮半島沿岸の捕鯨の写真

宇仁義和¹⁾

Photographs of the Korean coastal whaling at the beginning of the 20th century stored in Norway.

Yoshikazu Uni¹⁾

要 旨

1900年前後にヘンリック・メルソムが撮影した極東のガラスネガ50枚余りがノルウェーの博物館に保存されていた。これらのなかから、朝鮮半島沿岸の捕鯨に関連する写真13枚について、撮影地や被写体を調べて比定した。写真には、蔚山の長生浦捕鯨事業場や長箭湾と金剛山、ロシア太平洋漁業会社の捕鯨船ギョルギー号と乗組員や長崎捕鯨に備船されたメイン号、長崎の世界文化遺産の小菅修船場などが含まれていた。20世紀初頭の朝鮮半島沿岸の捕鯨に関する写真はめずらしく、良好な画質はとくに貴重である。

Abstract

More than 50 Far Eastern glass negatives taken by H. G. Melsom in around 1900 were preserved in a museum in Norway. Among these, on 13 images related to Korean coastal whaling, the location and subjects were examined and identified. These images included; the Jangsaengpo whaling station in Ulsan, Jangjeon Bay and Mt. Kumgang, the whale catcher Georgiy and her crew from the Russian Pacific Fisheries Co., the whale catcher Main chartered by Nagasaki whaling Co. and Kosuge Slip Dock, a World Cultural Heritage site, in Nagasaki. The image that portrays whaling on the Korean Peninsula at the beginning in the 20th century is rare and those images with high resolution are extremely valuable.

はじめに

日本近海でのノルウェー式捕鯨は、ロシア極東から朝鮮半島にかけての日本海西部の沿岸部でロシアの企業によって1890年頃から開始され、長崎を窓口に大量の鯨肉を日本国内にもたらした。「韓海捕鯨」として注目されたロシア捕鯨は、船長こそロシア人であったが、操業はノルウェー人砲手が指揮し、水夫の多くが朝鮮人で炊事夫は中国人であった(朝鮮漁業協会 1900, 渡邊 2006: 34-41)。しかしながら、捕鯨船の姿や解剖などの様子、多国籍にわたった乗組員などの特徴を伝える情報は、これまでは文書や文献だけにほぼ限られていた。日露戦争後にロシアに代わって捕鯨を始めた日本企業についても同様で、20世紀初頭の朝鮮半島沿岸での捕鯨に関する視覚資料は、捕鯨船乗船ルポルタージュ「実地探検捕鯨船」(江見 1907)の口絵写真や絵葉書などきわめて少数で、画質的にも不十分なものであった。このような状況に対し本論は、1900年前後に撮影されたガラスネガ(乾板)をデジタルカメラで複写して鮮明な画像を作成し、これを用いて撮影地や被写体、撮影年代などをできる限り特定し、写真を用いて当時の捕鯨の様子を解説するものである。これらは、乗組員の構成や寄港地など文字情報の証拠となるだけでなく、文献資料では得られなかった事業場の設備、西洋船と弁財船を改造した和洋折衷船などの船舶の状況、船舶名称、事業場の立地環境や周辺集落の様子など、当時の捕鯨を取り巻く環境が視覚的に明らかとなる新しい資料と考える。

資料と方法

用いた資料は、ノルウェー王国ベストフォル県 Vestfold Fylkeskommune テンスベルク市 Tønsberg にある城山博物館 Slottsfjellsmuseet (旧ベストフォル県博物館 Vestfold Fylkesmuseum) に寄贈されたガラスネガである。撮影者は、東洋捕鯨などの日本企業でも砲手として活躍したヘンリック・メルソム Henrik Govenius Melsom 1870-1944 である。彼は、捕鯨砲を発明したスベン・フォインの捕鯨事業に参加したあと、1897年にウラジオストックに移りケイゼルリング伯爵のロシア太平洋漁業会社で砲手として働き、7年を過ごした。日露戦争時に一時帰国したが、自ら捕鯨船を購入して再び朝鮮半島沿岸の捕鯨に従事し、1912年にノルウェーに帰国したという(SKIPSREDER H. G. MELSOM <http://www.lardex.net/larvikmelsom/hgmelsom.htm> 2017年7月31日閲覧)。日本企業での就業は、後述のとおり1906(明治39)年からである。

写真の原所有者は、メルソムの次女で長崎生まれのシグリ Sigrid Govenius Melsom 1903-2001 である。なお、日本語文献では、Melsom の名前を「メルソン」や「Melson」と誤記したものが目立つ(明石編 1910, 神長 2002, 宇仁ら 2014など)。ベストフォル県は、スベン・フォインの故郷であるテンスベルク市、捕鯨博物館で有名なサンデフィヨルド市などが存在するノルウェーの大型捕鯨の中心地である。ネガの存在は、筆者が2016年9月にベストフォルアーカイブ Vestfoldarkivet に対

1) 東京農業大学生物産業学部 099-2493 北海道網走市八坂196

1) Faculty of Bioindustry, Tokyo University of Agriculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2493, Japan.



図1. 本論で言及した朝鮮半島の捕鯨根拠地などの位置

し、1900-1930年代の日本の近代捕鯨に関連した写真の所蔵について照会したことへの回答の形で示された(Lone Kirchhoff 私信 2016. 9. 20)。筆者は、2016年11月に同アーカイブを訪問してネガを実見、約190枚を複写したほか、写真のデジタルデータを複写との重複を含め47枚分を得た。ネガには、シグリが長年住んだ家、ノルウェー国内の風景や捕鯨船、イタリアのボンペイ、インドなどの写真も含まれ、日本を含めた極東地域に関連すると判断した写真は52枚であった。この52枚について、文書や文献、関連する絵葉書や写真、さらには撮影地を訪問することなどにより、被写体情報の特定を可能な範囲で行なった。その結果は、写真の解説レポートとしてアーカイブに送付し、現在ウェブサイトで公開されている(紹介ページ HJELP FRA JAPAN - GAMLE FOTOGRAFIER IDENTIFISERT <http://www.vestfoldarkivet.no/hjelp-fra-japan-gamle-fotografier-identifisert/>、pdf 直リンク <http://www.vestfoldarkivet.no/wp-content/uploads/2017/05/rapport-unzi.pdf> 13.5 MB)。

本論は、H. G. メルソム撮影のガラスネガ極東関係分52枚のなかから、捕鯨や捕鯨船に関係した写真13枚について、より詳しい説明を加えたものである。写真には、撮影地や被写体が特定できなかったものもあるが、他では得られない貴重な記録として収録した。捕鯨船の名称のうち外国船籍のものは末尾に「号」を付加して表記している。朝鮮半島の地名は地図を参照されたい(図1)。読み仮名は、日本語での呼称である。

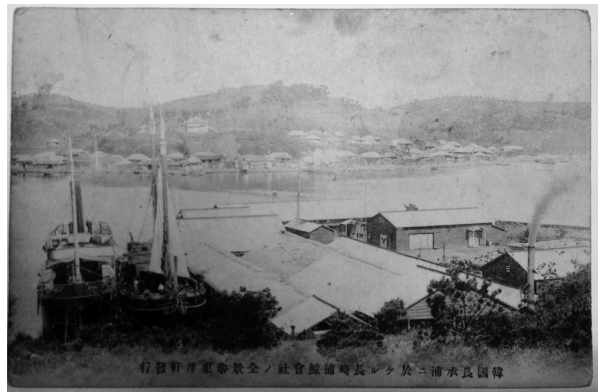


図2 発行年不明の絵葉書「韓国長承浦ニ於ケル長崎捕鯨会社ノ全景*東洋軒発行」(勇魚文庫蔵)

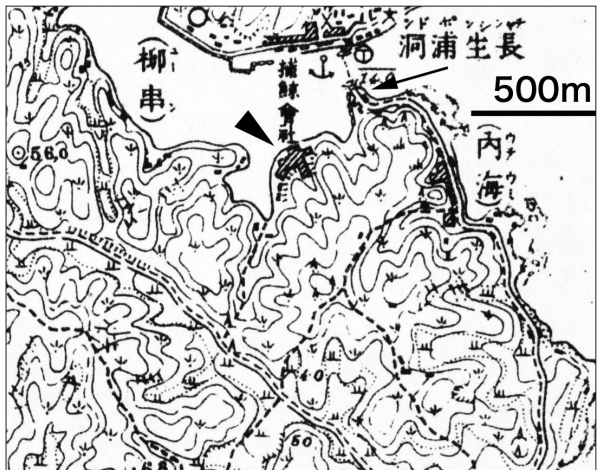


図3 東洋捕鯨蔚山事業場の場所(矢頭)と長崎捕鯨合資社長生浦事業場の推定位置(矢印)。5万分の1図「長生浦」(大正3年測図、昭和11年修正測量、同17年陸地測量部印刷発行)に加筆(岐阜県図書館蔵)

写真の解説

写真1 長崎捕鯨合資社長生浦捕鯨事業場

朝鮮半島南東部、現在の蔚山[うるさん]広域市の南部にあった長崎捕鯨合資会社の長生浦[ちゃんせんぼ]捕鯨事業場である。陸地には右端に倉庫のような建物が見え、中央右に鯨の下顎骨でできた門のような飾りが見える。クジラを吊り下げる解剖設備の支柱「ボック」が見えないことから、解剖は解剖船によって行われていたと思われる。背景は、地形から現在は長生浦鯨博物館などがある長生浦の集落である。被写体の典拠は、勇魚文庫蔵が所蔵する発行年不明の絵葉書「韓国長承浦ニ於ケル長崎捕鯨会社ノ全景*東洋軒発行」(図2)であり、建物の形状や配置、背景の民家の並び、建物に描かれた尾びれの図、写真1では右手の長崎捕鯨の建物、図2では右下の建物にある横三本線の印などが一致する。図2に比べ写真1は事業場の建物が少なく、より早い時期の撮影と思われる。長崎捕鯨合資会社の略称は「三〇[さんまる]会社」であるので(渋谷 1967: 20-21)、横三本線の印は社章であってもおかしくない。長生浦の漢字表記は、絵葉書のような「長承浦」も使われたが、当時から長生浦の使用は普通であり、本論では現在の表記に従った。絵葉書



写真1 長崎捕鯨合資会社長生浦捕鯨事業場 Henrik Govenius Melsom / Slottsfiellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真2 長崎捕鯨合資会社長生浦捕鯨事業場 Henrik Govenius Melsom / Slottsfiellsmuseet / Vestfoldmuseene

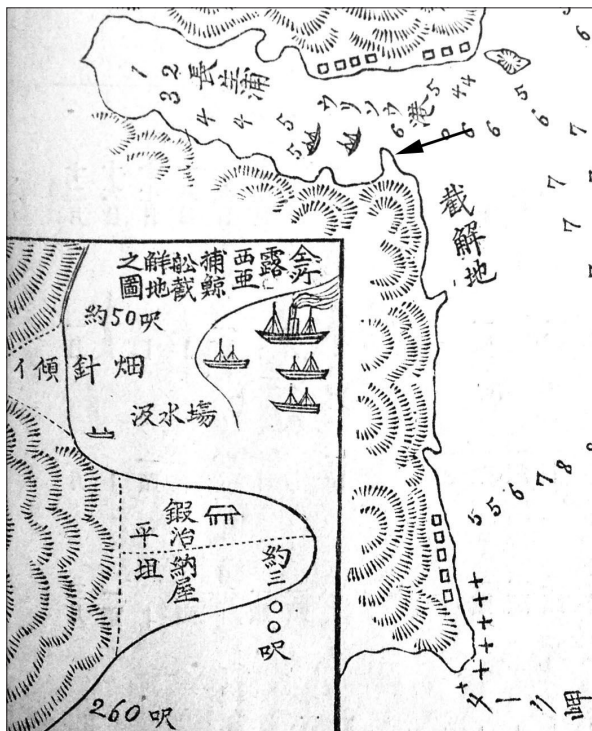


図4 ロシア太平洋漁業会社の長生浦事業場の位置図、矢印は図2で記した長崎捕鯨合資会社長生浦事業場の推定位置に相当すると判断した突端で、左下は90度回転したその拡大図(朝鮮漁業協会1900: 6 に加筆)

の「長崎捕鯨会社」というキャプションは、蔚山に事業場を有した長崎捕鯨組合またはその後継で1904(明治37)年に設立された長崎捕鯨合資会社(渋谷 1967: 20-23)のどちらを指すのか判然としないが、長崎捕鯨組合が日本遠洋漁業から租借地の一部を無償で譲り受けたことで改組して長崎捕鯨合資会社を設立したことから(明石編 1910: 239-240)、長崎捕鯨合資会社と判断した。また、中央右の黒い帆船の船尾には「妙見丸」の文字があり、手前横向きの弁財船は2本マストで縦帆を備えた和洋折衷船である。東洋捕鯨はこの地の事業場の名称を蔚山事業場としていた。写真の長崎捕鯨

事業場の場所は、岬状の地形、対岸の近さや北東方向の見通しから、東洋捕鯨の事業場から北東にある突端のように見える(図3)。当時の雑誌が伝えるロシア太平洋漁業会社の裁割地の土地にも似ており(図4)、長崎捕鯨組合や後継の長崎捕鯨合資会社は、その施設をそのまま利用したものかも知れない。なお、東洋捕鯨はこの地の事業場の名称を蔚山事業場としていた。

上記のように上限は長崎捕鯨合資会社が蔚山に陸上基地を確保した1904年であり、同社は1909年に東洋捕鯨の設立に参加し会社が消滅したことから、撮影年は1904-1909(明治37-42)年である。なお、長崎捕鯨組合は、初めは山野邊組と称し(明石編 1910: 228)、長崎の紀平合資会社がロシア太平洋捕鯨会社の鯨肉販売代理店を解消した後、長崎の水産物問屋の有志が有川捕鯨会社の初鷹丸を借り受け朝鮮半島沿岸の捕鯨に出漁するときに紀平合資会社が資本金を半額出資することで話がまとまり、同社と問屋有志とで設立されたものである(渋谷 1967: 8)。同組合は一度解消したが(同: 10)、再度同じ名前で組織されている(同: 24)。

写真2 長崎捕鯨合資会社長生浦捕鯨事業場

写真1におなじ。より右側、東方向を撮影したもの。背景は長生浦の集落で、矢印は現在の長生浦鯨博物館の推定位置である。

写真3 長箭湾と金剛山

海岸近く切り立った岩山が連なる金剛山と長箭[ちゃんぜん]湾。写真の左に見える船は、捕鯨砲と見張台から捕鯨船と確認できる。場所の典拠は、地図(図5)および戦前の写真(図6)による。図5中の矢印は、Google Earth を用いて撮影場所から写真3の撮影方向を推定したものである。金剛山は山の連なりの総称で、写真中央の頂きは千佛山に比定した。



写真3 長箭湾と金剛山 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



図6 金剛山が見える長箭湾と碇泊する漁船、戦前の撮影(大洋漁業八十年史編纂委員会 1960: 267 に加筆)



図5 長箭湾と金剛山周辺の地図、矢印は写真3の撮影方向(改造社編 1930: 82 に加筆)



写真4 捕鯨船ギョルギー号と乗組員 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

1899年、ロシア太平洋漁業会社が裁割場として大韓帝国から許可を得たのが、新浦[しんぽ、新浦とも]の沿岸に浮かぶ馬養島[まようとう]、長箭、そして蔚山の長生浦であった(朝鮮漁業協会 1900)。なお、ロシア太平洋漁業会社は、この許可の取得直後に、「ケイゼルリング伯爵太平洋捕鯨漁業株式会社」に改称している(神長 2002: 61)。また、金剛山は日本統治時代から景勝地として知られており、現在も韓国と北朝鮮との合同での観光開発事業が試行されるなど観光地として有望な場所として知られる。撮影年は、ニコライ号とギョルギー号がウラジオストクに到着し、ロシア太平洋漁業会社が操業を開始したと推定される1895年(神長 2002: 60)からメルソムがノルウェーに帰国した1912年の間、1895-1912年である。なお、ロシア太平洋漁業会社の設立について、明石編(1910: 185-188)は1891年とするが典拠不明であり、ロシア側の研究からは1894年の方が有力という(神長 2002: 60)。

写真4 捕鯨船ギョルギー号と乗組員

船名は人物の背後上部にある救命浮輪の文字 ГЕО

Р Г И И [ギョルギー、神長 (2002) はゲオルギイとしている]から判断した。I の文字はロシア語でも1918年までは使われていた(黒田 1998: 83-87)。人物背後中央の銘板の文字は AKERS MEK. VÆRKSTED [アカース機械製造所]で、下部の文字で見えているのは一部であるが、ノルウェー独立以前のオスロの名称 KRISTIANIA [クリスチヤニア]と刻まれている。ここに写る人物は12名で、後列左から3人目がメルソムである。ギョルギー号の乗組員については1899-1900年は13人、1901年は12人で、ロシア人船長、ノルウェー人砲手、ロシア人機関長、朝鮮人水夫8人、中国人炊事係(1899-1900年は2人)という記事がある(朝鮮漁業協会 1900, 森田2000, 渡邊 2006: 34-35)。写真の人物が1901年のとおりだとすると、ロシア人船長が後列向かって右から4人目、炊事係は乗組員のなかで最も地位が低いので、甲板に座った前列右端の人物だと考える。同船は、日露戦争勃発時には上海に逃れたが(明石編 1910: 232)、同地避難中に内外水産株式会社に買収された(同: 263)。なお、前列中央の男性が手にしているのは、なで肩の形状とラベルの図柄からキリンビールの



写真5 おそらく捕鯨船ニコライ号の乗組員 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

ビール瓶と判断している。ギョルギー号の名は、Tønnessen (1967: 187, 188, 210) にも現れ、ウラジオストク近郊の捕鯨基地ガイダマークに到着したのは1895年という(神長2002: 60)。撮影年は、ギョルギー号の到着からケイゼルリング伯爵太平洋捕鯨漁業株式会社が日露戦争によって操業停止に至る1895-1904年である。なお、ノルウェーのスウェーデンからの独立は1905年である。

写真5 おそらく捕鯨船ニコライ号の乗組員

船名は不明であるが、少数の欧州人と多数の東洋人という組み合わせから、ロシア太平洋漁業会社のもう一方の捕鯨船ニコライ号の乗組員と推定した。ニコライ号の乗組員は、1899-1900年はロシア人船長、ノルウェー人砲手、ロシア人機関長、朝鮮人水夫8人、中国人炊事係2人の13人、1901年は12人で中国人炊事係が1名となる(朝鮮漁業協会 1900, 森田2000, 渡邊 2006: 34-35)。写真に写る人物は14名で、これとは人数は異なるが、欧州人が後列左側の3人であれば、この部分は合致する。ただし、撮影場所は別の船かも知れない。撮影年は、写真4と同様に1895-1904年である。

写真6, 7 解剖船での解剖の様子

写真6と7は同一場所での連続した写真である。船名は不明、撮影場所は解剖作業中であることと、背景の植生から朝鮮半島沿岸と思われる。陸上設備に横付けせずに解剖していることから、日本の捕鯨ではなくロシア太平洋漁業会社の写真と判断した。当時は、日本の捕鯨会社も解剖船を使用しており、朝鮮半島沿岸の捕鯨は事業場を欠いた状態で始められたが、撮影者のメルソムがその時期に契約関係のない日本の解剖船で撮影することは考えにくい。撮影時期は、同社が裁割地を確保する1899年以前かも知れないが、裁割地の地上設備が整備された時期は不明であり、撮影年は写真4や5と同様に1895-1904年である。



写真6 解剖船での解剖の様子 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真7 解剖船での解剖の様子 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

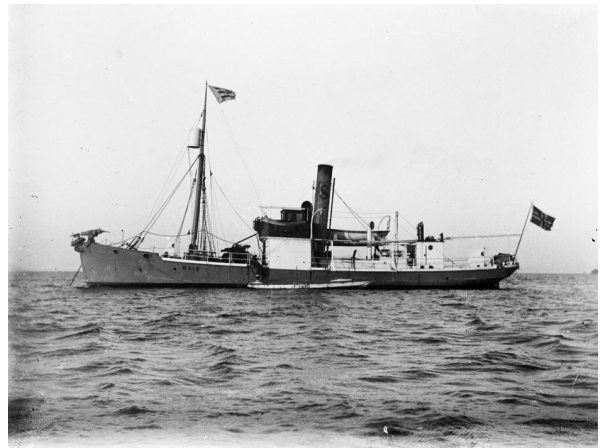


写真8 長崎捕鯨合資会社が備船した捕鯨船メイン号 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

写真8 長崎捕鯨合資会社が備船した捕鯨船メイン号

船尾にノルウェーの国旗を掲げた捕鯨船メイン号。船名はマストのあたりの舷側上部にはっきり見えている。マストの旗は、写真1と写真2で長崎捕鯨合資会社のものと推定した印と同一であることから、同社がチャーターしたものと判断した。

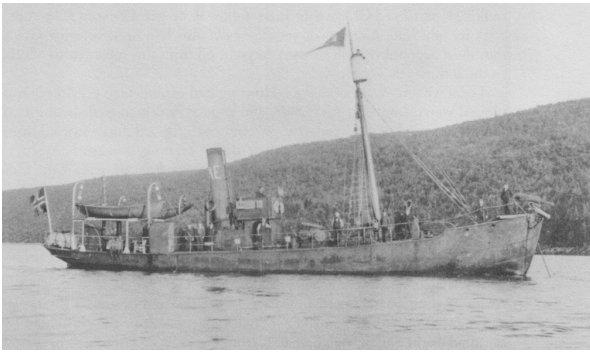


図7 カナダ大西洋岸でノルウェー人が経営する捕鯨会社で操業していた捕鯨船 Humber(Dickinson and Sanger 2005: 51より)

同社がメイン号を備船したのは1906(明治39)年で(明石編 1910: 252)、煙突の印(ファンネルマーク funnel mark)は、おそらくノルウェーの会社のもと思われる。撮影場所は不明だが、長崎捕鯨合資会社の旗とすれば、同社の漁場であった九州北部から朝鮮半島沿岸と考える。撮影年は、長崎捕鯨合資会社のチャーター開始から東洋捕鯨に合流するまでの1906-1909年である。

写真9 おそらく捕鯨船第二東郷丸

煙突の印は長崎捕鯨であり、同社の社有船と判断される。船名部分を拡大しても被写体ブレのため判読不能だが、漢字5文字の船名であることは判断できる。同社が所有した捕鯨船のうち漢字5文字の捕鯨船は、第一東郷丸と第二東郷丸の2隻であり、写真の船名の右から2文字目は一よりも二であるように見える。このことからおそらく第二東郷丸と判断した。第二東郷丸はノルウェーで建造され、カナダ大西洋岸でノルウェー人が経営する捕鯨会社で Humber として活躍した(図7)。長崎捕鯨が購入したのは1906(明治39)年で、改名してこの名になった(渋谷 1967: 23)。明石編(1910: 252)では1907年の購入としている。撮影場所は不明だが、九州北部や朝鮮半島近海と思われる。撮影年は、購入から東洋捕鯨に合併吸収されるまでの1906-1909年である。

写真10 おそらく捕鯨船第二東郷丸

写真9におなじ。被写体ブレは少ないが船名は小さくて拡大しても判読できない。

写真11 捕鯨船ギョルギー号

不鮮明であるが、船体中央右側の船名が Γ Ε Ο Ρ Γ Ι Ι と読める。撮影場所は不明だが、背後の山の植生から朝鮮半島沿岸と思われる。撮影年は、写真4と同様に1895-1904年である。通信省管船局が発行する『日本船名



写真9 おそらく捕鯨船第二東郷丸 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真10 おそらく捕鯨船第二東郷丸 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真11 捕鯨船ギョルギー号 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

録』に現れる同船の船名は「ギョルギー丸」、船体番号10328であるが(通信省管船局編 1908, 1916)、船に直接記された文字がいつまでロシア語表記だったのかについては証拠となる写真などの資料が得られていないため不明である。このことは明治41年版と大正5年版で確認した。



写真12 三菱造船所小菅修船場 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



図8 稼働中の三菱造船所小菅修船場(岡林ら編 1995: 95、長崎県立長崎図書館蔵)

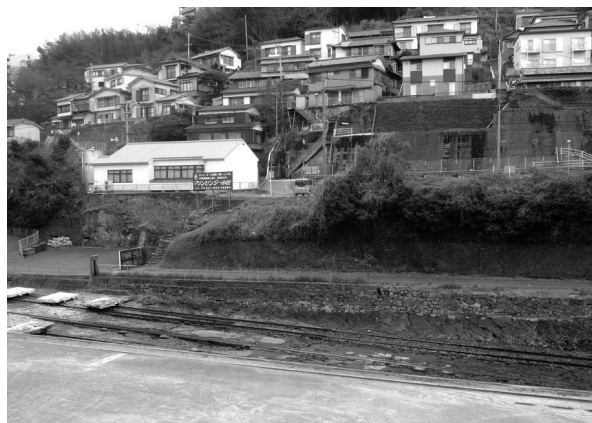


図9 現在の小菅修船場跡(2017. 3. 1 筆者撮影)

写真12 三菱造船所小菅修船場

長崎市にある三菱合資会社三菱造船所小菅修船場。当時の設備の一部が現存しており、1969(昭和44)年に「小菅修船場跡」として国指定史跡に指定された。2015年7月には、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の一つに登録された。撮影地を特定した典拠には、長崎県立長崎図書館が所蔵する写真(図8)があり、現在も地形はほぼそのままである(図9)。写真の捕鯨船は前述のメイン号で、塗装工事中と考



写真13 メルソム砲手の次女シグリ Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



図10 「実地探検捕鯨船」(江見 1907)の口絵写真に掲載されたH. G. メルソムの次女 Sigrid[シグリ]

える。写真8と同一のファンネルマークも見える。撮影年は、備船から長崎捕鯨が東洋捕鯨に合流するまでの1906-1909年である。こうした船舶関連の施設が整っていたことで、日本国内で捕鯨船が操業できたのである。小菅修船場の鮮明な写真はほとんどなく、世界遺産の資料としても貴重と考える。

写真13 メルソム砲手の次女シグリ

蔚山の捕鯨船同乗記「実地探検捕鯨船」(江見 1907)の

口絵にある「砲手メルソン氏の愛児」とキャプションが添えられた幼女の写真(図10)と一致し、図10と写真13は同一のネガから作成されたと判断した。メルソムの子どもは娘5人で、生まれ年から1903年生まれの子 Sigrid Govenius Melsom 1903-2001 のみが該当する(Krohn-Holm 1972: 67-69)。シグリは長崎で生まれており、本報告の写真の原所有者である。撮影年は年齢と江見(1907)の出版年から、1904-1907年と考える。

おわりに

以上がノルウェーの博物館が保存する、ヘンリック・メルソムが撮影した20世紀初頭の朝鮮半島沿岸での捕鯨の写真である。本論で紹介した以外にも、朝鮮の伝統的な民家、ノルウェー人砲手たちと朝鮮人、日の丸が多数翻る釜山の船着場、ノルウェー人と日本人の船上記念写真、福岡の日蓮聖人銅像、福岡と想われる松林のなかの病院、日本人看護婦、神社や寺院など、日本や朝鮮に関連の深い写真が数十点含まれている。近代初期の日常を写した写真について、撮影地の比定や被写体を特定することは、歴史的な事実を伝える情報、研究素材の増大を意味する。本報告では、未登録資料の複写が許され、筆者が撮影情報のまとめを送ると、それが直ちにインターネットで公開された。今後、朝鮮や九州と思われる写真についても同定作業を急ぎたい。

ロシアから日本へと事業主体が移動した20世紀初頭の朝鮮半島沿岸での捕鯨は、日本の近代捕鯨の導入期を考えるうえで重要な意味を持つ。本論で紹介した写真によって、服装や容貌など文書では伝えることが難しい事柄も視覚情報として議論可能になったと考える。捕鯨でまちづくりを進める蔚山広域市や長生浦鯨博物館など、韓国の捕鯨関係機関にとっても有益な資料になるだろう。さらに、捕鯨に関する写真の発掘と撮影情報の整理が進み、鯨を巡る産業や人びとの姿が明らかになっていくことを望みたい。

謝辞

本報告を行なうにあたり、次の機関と個人にお世話になりました。記してお礼申し上げます。VestfoldarkivetのLone Kirchhoff氏、SlottsfjellsmuseetのRune Sørli氏、Hvalfangstmuseet[サンデフィヨルド捕鯨博物館]のStig Tore LundeとHanne Garmelの両氏、Vestfoldmuseene IKS[ベストフォル県公共博物館連合]のTorill Johanne Mobeck-Hanssen氏、ヘンリック・メルソムの従兄弟でMelsom & Melsom Co.を共同経営したMagnus E. Melsomの孫であるErling Melsom氏、スヨーボルト砲手の孫であるTorstein Sjøvold氏、勇魚文庫の細田 徹氏、近代捕鯨史研究室の竹内賢士氏、下関海洋科学アカデミー鯨類研究室

の石川 創室長、長崎県立長崎図書館、三菱重工業株式会社長崎造船所史料館。調査は、JSPS科学研究費補助金「明治大正期に遡る一次資料「事業場長必携」を用いた東洋捕鯨の操業復元」(基盤研究C: 2014-2016、課題番号26350365)を得て行いました。

引用文献

- 明石喜一編(1910) 本邦の諾威式捕鯨誌. 280+40pp., 東洋捕鯨, 大阪.(復刻版:マツノ書店 1989)
- 朝鮮漁業協会(1900) 韓海捕鯨業之一斑. 大日本水産会報, 212: 4-19.
- Dickinson, A. B. and Sanger, C.W. (2005) *Twentieth-century Shore-station Whaling in Newfoundland and Labrador*. 254pp., McGill-Queen's University Press, Montreal.
- 江見水蔭(1907) 実地探検捕鯨船. 202pp., 博文館, 東京.(復刻版:ゆまに書房 1993)
- 改造社編(1930) 日本地理大系第12巻朝鮮篇. 416pp., 改造社, 東京.
- 神長英輔(2002) 北東アジアにおける近代捕鯨業の黎明. スラブ研究, 49: 51-79.
- Krohn-Holm, J. W. (1972) *Slekten Melsom fra Vestfold*. 125pp., Saturn Trykkindustri As., Drammen.
- 黒田龍之介(1998) 羊皮紙に眠る文字たち—スラヴ言語文化入門. 237pp., 現代書館, 東京.
- 森田勝昭(2000) 韓半島沿海捕鯨と資料の問題(2). 甲南女子大学研究紀要, 37: 1-15.
- 岡林隆敏・林 一馬・長崎市教育委員会編(1995) 長崎古写真集 居留地篇. 153pp., 長崎市教育委員会, 長崎.
- 渋谷辰三郎(1967) 捕鯨回顧. 139pp., 私家版, 長崎.
- 大洋漁業八十年史編纂委員会(1960) 大洋漁業八十年史. 301pp., 大洋漁業, 東京.
- 逋信省管船局編(1908, 1916) 日本船名録 明治41年, 大正5年.
- Tønnessen, J. (1967) *Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 2*. 618pp., Norges Hvalfangstforbund, Sandefjord.
- 宇仁義和・ロバート=ブラウネル・櫻井敬人(2014) ロイ・チャップマン・アンドリュースの日本と朝鮮での鯨類調査と1909-1910年の日本周辺での行程. 日本セトロジー研究, 24:33-61.
- 渡邊洋之(2006) 捕鯨問題の歴史社会学—近現代日本におけるクジラと人間. 222pp., 東信堂, 東京.